

思い出の記

牛越 恂

(昭和七年生)

私の岩手中学への入学は丁度終戦の年の昭和二十年でありました。あまり勉強もしないで作業の時間が多く、表紙も無く、墨で黒く塗りつぶした教科書、食べ盛りなのに弁当が無かったり、米だか芋だか豆だかわからないような混ぜ飯とか、着る服も靴も少しずつ配給される全く粗末なもので、貧困と混乱の時代でした。旧制から新制に変わり、混乱とめまぐるしい変化について行くのがやっとの生活で、本当に現在の生活から見たら別世界でありました。

しかしこの終戦後の混乱も次第に平靜になり、昭和二十三年の新制高校への切かえの頃は大部分生活にも落ち着きがでて来たように思われます。そして何よりも高校一年になって私の心に深く印象づけられたのは音楽の授業でありました。別に深い理由もなく音楽を選択したわけでしたが、その最

初の授業で、背の高いのが特徴の、学校を卒業したての生内義夫先生が歌ったフォスター作曲の「オールドブラックジョー」のメロディーが私の心に深く印象づけられたのでした。両手で弾くピアノのメロディーと不思議な魅力的な和音、先生のバリトンの声が一体となって一瞬われを忘れるような強烈な感動を私に与えたのでした。大袈裟に言うならば、今日の私の生活が決定された瞬間でした。

当時全く色気もない蛮からな雰囲気男子校の中に、この音楽の泉が丁度乾いた土に水がしみ込んで行くように流れて行ったのではないかと思えます。そして新時代への前進が学校中に起き、生徒も先生も努力したのでした。運動部はラグビー水泳、陸上、体操、アイスホッケー等で輝く成果を上げ私達一般の生徒もプライドを高く持てました。このような運動部の活動に呼応するかのようには、文化部の活動も活発になり、特に音楽部の八十名による男声合唱団は名前もグリーククラブとして他校に類を見ない立派なものでありました。ドレミもわからないあの頃の私でしたが、現在の高校

生でもなかなか困難な清水修作曲の「秋のピエロ」とか、ロマンチックな情感のただよう「水夫のセレナーデ」等は今でも重厚なハーモニーとか美しいメロディーが耳に残り、自分のパートを暗譜で歌えるくらいです。

最初の外部での発表は、岩手大学農学部講堂における招待演奏でした。上級生の後にかくれる様に立ち、足をかくかくさせたりしたこととか、独唱の部分を取った二級上の石塚氏の美しい声が昨日のようによみがえります。

指導する生内先生もありつただけの情熱を傾け、また指導を受ける生徒もそれを全身で受けとめ、まさに情熱と情熱のぶつかり合い、増城の中で燃焼するような激しいもので、高校生としてのエネルギーがそこに燃え、そうして心が純化して行ったものと思えます。

練習も全く厳しく、月月火水木金金の毎日で、放課後は自然に音楽室へ足が向くのでした。部員の中には個性的な人が多く、ラグビーの練習が終ると音楽室に駆けつける一級上の小沢氏、第一テノールの美声と豊かな声量で魅了した二級上の石

塚氏、成績がいつもトップクラスの村松氏とか井藤氏が一級上に居り、本当に多士済済であり、何か今日の高校生はこのような個性に欠けるような気がしてなりません。

この男声合唱としての活動がしばらくあってから、先生はそれに飽き足らず、岩手女子高校音楽部生徒との合同で「岩手フィルハーモニックソサイテーター」と言う混声合唱団を組織して活動を開始したのであります。小学校四年生から女子と一緒に勉強する機会がなかった私は何か恥ずかしいやら、恐いやらの複雑な気持ちでした。加えて相手の女生徒は楽譜をペラペラ読むので、私は仮名をふったり、練習終了後にこっそりと復習したりして恥を最少にし、男のプライドを保つのに懸命でした。しかし最終的には男子の方が女子より勝るようになったのは男の意地の結実ではなかったかと思えます。練習した曲もモーツァルト作曲の「レクイエム」等をラテン語で歌いました。この曲は一般の実力ある団体しか演奏できない曲なのですからいかに当時努力をしたか、また指導が良かったかという証拠にもなりません。

しかし何にもまして心に残るのは当時の国語の先生であった水原一作詩、生内義夫作曲の交声曲三部作、岩手山、北上川、三陸海岸の演奏です。三曲で一時間位かかる大曲で、詩といい、曲の構成内容といまことにすばらしい曲で、演奏者、聴衆に深い感銘を与えたものです。そしてこの曲を中心にして行なう音楽会はいつも満員で聴衆を感動させ、その評判は広く県外にも及んだわけでした。その他、芸術祭への参加、公会堂のステージから東北六県への生放送、スタジオからの放送、

録音等があり、感動の連続、ひたむきに前進したものであります。

今日までの私の人生でこれほど感動し、ひたむきになったというのはこの時代以外にはなかったと思えます。多分私が後に音楽を勉強し、音楽の教師になった理由はあの時代の感動ではないかと思えます。今私が生徒に教える立場になって、教育というのは、いかに感動が大切であるかということをつくづく感じます。

毎日の厳しい練習が終ると、上級生、先生との語らい、こっそり焼き芋を買ってきて女生徒に分けてやったりして、本当に深い人間的なつながりがあり、教科以外の人間的成長は、この部活動で養なわれたものと思えます。

このように日々、感動と張りのある生活も私が三年生になった時に生内先生の退職でピンチになりましたが、新任の柳館先生、諸先輩の指導、長期の休み等に来盛して指導して下さる生内先生の力で、中学生をボーイソプラノ、アルトに男声を加えて男子だけの混声合唱や、水原一作詩、生内義夫作曲の演奏時間が三十分もかかる大曲「平和」の初演、国立音大オーケストラ伴奏で発表した「岩手山」、水原一作詩、生内義夫作曲の「岩手高校創立二十五周年記念祝典カンタータ」の演奏等と挫折することなく、日々活動できましたのは本当に幸せと思つて居ります。

人間の進路を決定するとき、最も多感な頃の感動とか体験がその要因となる場合が多い。私の場合もこの高校時代の音楽の活動がなかったならば別の路を歩んでいたのではないかと思えます。現在の自分の職業に誇りと充実感を感じているの

を考えると、まさに「私は岩手高校に学んでよかった」と、しみじみ感じる今日この頃であります。

花のニツパチ

村上 昇

(昭和28年生)

母校が創立五十周年を迎えたことは、私学の雄として一段と重みを増した感じで、誠に喜ばしいかぎりである。

半世紀にわたる母校の歴史と、その一コマとしての三十年前の若かりし時に思いをはせるとき、懐しい師、友、そして共に汗し、涙し、栄光に輝いた「石桜」の数々が昨日の如く思い出され、胸の熱くなるのを覚える。

私は、新五回生である。戦後間もない昭和二十二年に岩中に入學し、二十八年に岩高を卒業した。昭和一ケタのしんがりをつとめる我々は、激動の時代に巡り合わせたことから、学制の面でも、その改革の節目を歩いてきた。即ち、我々は世界第二次大戦の開戦の年に、その年生れた国民学校というハイカラな小学校に入學したのであったが、この国民学校は我々の卒業と同時に消えた。そして今度は、現行の六・三・三制の実施により、我々新五は、図らずも、新制岩手中学の第一期入学生としての光榮に浴したのである。

我々新五は、岩中が当時、県内唯一の入試校であったこともあって、県内各地から集まった。このため、話す言葉も多種多様で、ちよつとした「外人部隊」の感があつた。

入試といえば、口頭試問の一つとして、「さい判」のさいと「さい培」のさいの違いは？などと
きかれたのを記憶している。出身の厨川（国民学
校）からは、九名受験し、三名の合格であった。
「岩中の門」は、「狭き門」であり、東大なみの
難しさがあつたのである。

ところで、我々新五は、一〇〇名ならずと極め
て「少数」であつたが、同時に「精鋭」であつた
ように思う。

石桜は、いつの時代も少数精鋭であると言える
が、我々新五が在学した昭和二十二・三年から二
十七・八年にかけてが、その精鋭ぶりを遺憾無く
發揮した、言わば「黄金時代」ではなかつたらう
か。殊にも、二十六・七年は、創立二十五周年を
迎えて意気軒昂、正に「石桜満開」の感があつた。
「石桜」を抜きにして、当時の岩手の体育、文
化を語ることはできないであらう。

石桜は、伝統のラグビーを初め、水泳、体操、
バレー、バスケット、テニス、硬式野球及びアイ
スホッケーの各種目に優勝し、陸上競技、卓球、
ハンドボール等も上位を占めた。他校に比し、二
分の一、三分の一と少数ながら「質」で勝負し、
高体連全日制総合第二位の成績を勝ち得たのであ
る。

バレー、バスケットなど初優勝に輝いた種目が
多く、それだけに喜びも大きなものがあつた。人
気の野球も、この年初優勝を飾つたが、黄金の左
腕投手小武方を擁して勝ちまくり、遠い道のりを
いとわず、連日、ゲタバきで市営球場につめた大
応援団を狂喜させたものである。

こんな調子だから、手ぶらでは、つまり優勝旗

を手にしなければ、とても決まりが悪くて学校に
帰れない有様であつた。不運にも敗れたチームの
主将は、朝礼での成績報告会で、随分と汗をかいた
ものである。

このような全盛時に、高二、高三であつた我々
新五が、その主力となり、原動力となり得たこと
は、幸せであり、この上ない誇りである。

ラグビーの佐々木美則、角掛良見、水泳の村井
良和、バレーの野村道夫、バスケットの吉田益人
陸上競技の佐藤忠三、瀬川雅三、中川功哉、ハン
ドボールの角掛武、柔道の下河原善嗣郎、三船朋
久、硬式野球の吉田勉、小武方信一、アイスホッ
ケーの藤原幸三、石川富喜蔵治、体操の佐々木靖
……思い付くままに挙げたこれらの面々は、知る
人ぞ知るその道の名手であるが、枚挙にいとまが
無い。（ここに挙げたのは、強者ぞろいの新五の
ほんの一握りである。森の石松みたいに「強い奴
が、ごろごろしているのである。」）

一方、文化部も、運動部に劣らぬ活躍ぶりであ
つたが、小笠原、生内両先生の指導による絵画、
音楽、秋浜悟史を中心とする演劇等々、それぞれ
高い評価を受け、絶賛を博したものである。

それでは肝腎の学業の方はどうであつたか。こ
のことについては、我々を知る先生方の言をまつ
よりほかはない。が、秀才の誉れの高かつた田村
寿が、岩手日報の学力コンクールで県下第二位と
なつたほか、数多くの名が紙上をにぎわしたこと
また東大へ進んだ田村を初め、多くの仲間が早稲
田、慶応へとそれぞれ雄飛していったことを、特
に現役の諸君に申し添えておきたい。

なお、小武方が第八号の、田村が第九号の、小

生が第十号の石桜功労章を受賞した。この上ない
名誉であり、青春の思い出として、終生忘れ得ぬ
ことである。

祝儀気分もあつて、どうも「新五、自画自賛の
章」になつてしまつたが、このような画期的な戦
績、成果は、ひとり「新五」の産み出したもので
ないことは言うまでもないことである。

佐々木校長（当時）、山中教頭（当時）を始め
とする数多くの敬愛する諸先生、諸先輩の指導よ
ろしきを得たればこそであり、殊にも、石桜の総
帥、石桜スピリットのシンボルとも言うべき戸嶋
先生の存在が大きく、更には、歴史と伝統の力が
あつてのことである。ちよつと視点を變えるなら
中学、高校という大事な六年間を、一貫して石桜
という学びやで過し得たことも、一つの大きな要
因であらう。

ところで思い出の記としては、何はともあれ、
己れのすべてであつた「体操部」のことについて
触れぬわけにはいかない。

足沢という神様のような先生と、鳴海正人（先
達の人）、吉川孝正（力と技の人）、四戸孝丸
（努力の人）、小林陵二（理論とセンスの人）、
斎藤勉（闘志の人）といった諸先輩のこと、これ
までに高体連（春季）団体優勝十二回、国体選手
三十五名を数え、インター・ハイにも連続して出
場し、入賞するなど栄光に輝く部史のこと、小生
自身の参加した国体（第六回広島・第七回山形）
やインター・ハイ（茨城、京都）のこと、合宿練
習や部員全員によるアルバイト（市営球場でのア
イス・キャンディ売り）のこと等々思い出は尽き
ない。

しかながら、もはや約束の紙数である。残念
ながら割愛せざるを得ない。

おしまいに、一言。最近の母校石坂健児は、ど

うしたことだろう。全く「鳴かず飛ばず」のよう
に思われてならない。校歌や応援歌にみられる心
意気を想起して、この創立五十周年を機に、大い

に雄飛してほしいものである。